

子どもの発達と学校外教育(Ⅱ)

— 児童のスポーツ教室参加をめぐる母親の意識を中心に —

深 田 博 己*・小 池 源 吾**

Hiromi FUKADA and Gengo KOIKE
Child Development and Out-of-School Education (II)
— Focused on Mothers' Consciousness about Their Children's
Participation in Athletic Clubs —

Abstract : This study was designed (1) to investigate mothers' view of athletic clubs for children and (2) to examine the meaning of athletic clubs for child development. Questionnaires were distributed among clubs participants' mothers, 455 of which were complete and available for the analysis. These mothers have much interest in education. And children's participation in athletic clubs has been much influenced by their mothers. Because of mothers' laying emphasis on intellectual training, however, children's rounded development seems to be arrested.

問 題

過去二十数年間にわたる高度経済成長期を通じて存続してきた教育のあり方は、今や幾多の欠陥を露呈するにいたった。そうした情勢下で、にわかに注目され始めたのが学校外教育である。それは、時短方針や学校事故賠償等教師の側での問題を背景にしながらも、能率主義に起因した教科中心の学校教育、加うるにそうした学校教育一辺倒の教育への批判的検討に端緒を有する。すなわち、学校外教育とは、従来の教育体制に内在する問題と限界を認識した上で、学校外に存する教育力に注目し、そこに教育の現況を打解するための有効な解決策を見いだそうとするものであった。

学校外教育が、期待される役割を完遂するには、学校教育、家庭教育とは異なる独自の機能を担う第三の生活領域としての定着が必要である(吉田, 1978)。しかし学校外教育の明確な定義すら確立されていない現段階にあっては、理論構築に向けての努力が払われる一方、学校外での子どもの生活実態を把握することも重要な基礎作業となってくる。

ところで横溢する知育偏重の風潮の中で、子どもたちは、時間、空間、友だちを奪われ、遊びはもとより身体活動を失いつつあるといわれる。結果的に、体格は向上したが体力はない子どもが急増する(正木, 1979)。骨の異常なもろさと骨折、軀幹筋力の弱化、肩こり、神経性胃かいよう等、子どもがむしばまれていることを証左する事例は枚挙にいとまがない。子どもの発達が「解体的危機」(酒匂, 1978)に瀕しているといわれるゆえんである。

ここに学校外教育において身体活動、スポーツの機会をいかにして保障するかが、子どもの全面発達にとっての重大な課題としてうかびあがってくる。こうした問題意識を念頭におき、実施したのが「スポーツ教室に関するアンケート調査」であった。本論文は、この調査結果に基づき、ひとつには、母親の意識からスポーツ教室の特質ならびにその学校外教育における意味を把握し、つぎに子どもの発達という観点からスポーツ教室の問題点を究明することを目的にしている。

なお、ここで取り上げているスポーツ教室とは、県立体育館、県営グラウンド、県立屋内プールにおいて財団法人広島県教育事業団が主催事業として開設している各種スポーツ教室を意味している。

* 島根大学教育学部幼年期教育研究室

** 広島大学教育学部教育学研究室

方 法

1 調査対象

この調査は、広島市内に設置されている広島県立体育館、県立屋内プール、県営グラウンドの3カ所において財団法人広島県教育事業団が主催する各種スポーツ教室に小学生を参加させている母親を対象に実施した。

調査票配布総数752票、そのうち455票の有効回答票が回収され、有効回収率は60.5%であった。

有効票についての児童の性別、学年別の内訳は表1に示す通りである。ここから明らかなように女子の参加は極めて少ない(そのため統計分析に耐えないので、以後の分析では男子のデータのみを採用している)。これら男子の参加状況をスポーツ教室別に示したのが表2である。

表1 児童の性別にみた有効回収票数

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
男子	87	82	94	72	33	32
女子	5	6	5	20	14	5

表2 児童の参加しているスポーツ教室

	低学年	中学年	高学年	全体
サッカー教室	46	49	8	103
ラグビー教室	6	1	6	13
剣道教室	91	52	20	163
柔道教室	18	14	7	39
水泳教室	2	46	23	71
陸上教室	5	3	0	8
その他の教室	1	1	1	3

2 調査手続

調査にあたっては、スポーツ教室ごとに調査票を児童に手渡し、家庭に持ち帰らせて母親に記入を依頼し、再びスポーツ教室で回収する方式を用いた。調査は昭和52年6月から7月にかけて実施した。回答は無記名式であった。

3 調査内容

広島大学教育学部教育環境研究会の名称のもとに、「スポーツ教室についてのアンケート」用紙を作成した。調査の内容は、スポーツ教室参加前の児童の状態、

スポーツ教室参加の契機と目的、スポーツ教室への参加状況、スポーツ教室参加による変容、母親のスポーツ教室に対する評価、教育観および児童の通塾実態等、合計35項目から構成されている。

結果と考察

I スポーツ教室参加群の特性

ここでは、児童のスポーツ教室への参加実態とそうした児童をもつ母親の教育観からスポーツ教室の特徴を把握する。

1 スポーツ教室参加児童の概要

スポーツ教室参加者の大部分が男子であることはすでに述べた。加えて学年別分析では、低中学年児童が多く、5年生、6年生と高学年になると参加者数は激減している事実注目したい。

さてこれらスポーツ教室参加者は、どのような子どもたちであろうか。スポーツ教室に参加している子ども像から考察を始めよう。スポーツ教室参加前の子どもの健康状態、学業成績、体育の成績について母親に回答を求めた。

まず健康状態については、「じょうぶな方だった」33.0%、「ふつうだった」43.5%と、 $\frac{3}{4}$ の子どもはふつう以上の健康な状態にあったことがわかる。また学業成績では、「平均より上」と回答を寄せた者が48.5%と約半数を占め、「平均」33.0%、「平均より下」6.0%と続いている。学業成績をとくに体育に限定してみると、「平均より上」37.9%、「平均」36.0%、「平均より下」19.2%となっている。これらのことからスポーツ教室参加者の大半は、健康状態は良好で、学業成績の面でも平均以上の子どもたちから構成されていることが明らかになる。

スポーツ教室への出席に要する時間についてみると、片道1時間以上かけてスポーツ教室に通っている子どもは皆無である。30分以内の参加者が74.7%を占めている。スポーツ教室開設場所が広島市内中央部に位置していることを考え合わせると、明らかにほとんどの参加者は旧市内および新市内地域に住む子どもたちである。

2 スポーツ教室参加の契機

スポーツ教室への参加が子ども自身の意志によるものか、それとも親の意志を強く反映したものであるのか、これについては、「親としてはあまり賛成できないが、子どもが希望するので」やむをえず参加させたと答えた割合は2.5%と非常に少なく、「親も行かせたかったし、

子どもも希望したので」スポーツ教室に参加させたとする割合が74.0%を占めている。しかしながら、「子どもは行きたがらなかったが子どものために思って」参加させたとする母親が23.2%いる事実はどうのように解釈すべきなのか。

そこで、現在子どもを参加させているスポーツ教室を母親が知った直接のきっかけを尋ねてみた。「近所や知りあいの人から聞いて」が72.5%と圧倒的に多く、逆に「子どもから聞いて」6.0%は予想以上に低い割合にとどまっている。明らかに母親はスポーツ教室についての情報を子どもよりむしろ大人同士の会話から得ている。これらのことから、多くの場合まず親がスポーツ教室の存在を知り、それを子どもに伝え、親子相方の同意の上で子どもをスポーツ教室に参加させているようである。

そしてこのスポーツ教室を選択した理由はつぎのようであった。「家から近いので、交通の便がよいので」18.5%、「子どもの友だちが参加しているので」17.2%、「指導者、指導内容がすぐれているので」16.7%、「この種のスポーツ教室はほかにないので」12.2%、「費用が安いので」7.5%、「施設・設備がよいので」7.5%、「有名な教室なので、評判がよいので」4.5%。選択理由は、多様な項目に分散している。ひるがえっていえば、このスポーツ教室を選択する際に、決定的な理由はなかったということもできよう。しかも興味深いことに、指導、施設、設備等のスポーツ教室に固有の諸条件と同程度あるいはそれ以上に、地理的条件や友だちがすでに参加していることを選択理由にしている。

3 スポーツ教室参加群における母親の教育観の特徴

スポーツ教室に子どもを参加させている母親は、どのような教育観をもっているのだろうか。これら母親の教育観の特徴を把握するには、同年令の子どもをもつ一般の母親との比較が最も有効と考える。したがって前回我われ(深田・小池, 1978)が報告した児童をもつ一般の母親の教育観との比較検討を試みることにする。

前回の調査資料のうちから男子児童をもつ母親のデータのみを抽出し(低学年83票, 中学年138票, 高学年130票の計351票), それを一般比較群とした。

スポーツ教室参加群と一般比較群の教育観における差の検定には、児童の学年による影響を除くために対象群(スポーツ教室参加群, 一般比較群)の要因と学年(低・中・高学年)の要因の2元配置に基づく2×3の分散分析を行い、対象群の要因の主効果をもって両群間の差の有意性の指標としている。なお回答が反応カテゴリーの場合には、比率の角変換値を利用して同様の分析を行った。

スポーツ教室参加群と一般比較群における①教育関心

度を表3に、②教育の場に対する認知を表4に、③児童の通塾率を表5に示し、これらの項目に関して両群間を比較した結果を表6にまとめている。

スポーツ教室参加群, 一般比較群ともに、子どもの教育に対する母親の関心は高く、それは知育的側面のみならず、体育的側面についても該当する。しかし両群を比較すると、教育関心度は概してスポーツ教室参加群の方が一般比較群よりも高いことが指摘できる。

一般の母親よりも教育関心の高い母親たち、これは子どもの通塾実態からも裏づけられよう。スポーツ教室参加群と一般比較群における児童の通塾率を単純に比較した結果によると、学習塾の場合通塾率は差がないが、お

表3 スポーツ教室群と一般比較群の教育関心度

項 目		スポーツ教室群	一般比較群	
一般 的 関 心	家庭での 話し合い	しばしばある	41.2	35.9
		ときどきある	52.0	52.7
		あまりない	6.0	9.4
		ほとんどない	0.2	1.7
	情報注意	いつも気をつけている	39.0	31.1
		ときどき気をつけている	45.7	52.1
		あまり気をつけていない	13.0	31.4
		ほとんど気をつけていない	2.2	3.1
成 績 重 視 度	主要教科	非常に重視する	18.0	13.7
		かなり重視する	59.2	57.8
		あまり重視しない	21.7	25.6
		まったく重視しない	0.2	2.0
	体 育	非常に重視する	13.2	9.7
		かなり重視する	47.5	43.9
		あまり重視しない	38.5	43.9
		まったく重視しない	0.5	2.6
夏 期 コ ー ス 参 加	学習塾	ぜひ参加させたい	2.0	6.6
		できれば参加させたい	20.5	31.3
		あまり参加させたくない	39.5	37.0
		まったく参加させたくない	38.0	24.8
	スポーツ 教室	ぜひ参加させたい	45.2	26.8
		できれば参加させたい	51.0	64.1
		あまり参加させたくない	2.2	6.3
		まったく参加させたくない	0.2	2.8

注1) スポーツ教室群N=400, 一般比較群N=351。

この注1)は表4～表6に共通である。

注2) 表内の数値は%である。この注2)は以後の表に共通である。

表4 スポーツ教室群と一般比較群における教育の場に対する認知

項		目	スポーツ 教室群	一般 比較群
学校の 教育力 の認知	知育	非常に十分だ	9.0	10.5
		かなり十分だ	62.5	62.1
	あまり十分でない	24.2	25.1	
	まったく十分でない	0.2	0.6	
体育	非常に十分だ	4.5	6.0	
	かなり十分だ	40.2	54.7	
	あまり十分でない	48.0	35.6	
	まったく十分でない	4.0	1.7	
徳育	非常に十分だ	2.5	3.4	
	かなり十分だ	35.2	39.9	
	あまり十分でない	51.0	45.0	
	まったく十分でない	8.2	9.1	
情操教育	非常に十分だ	2.7	2.0	
	かなり十分だ	34.2	33.9	
	あまり十分でない	52.0	52.4	
	まったく十分でない	7.7	9.7	
家庭の 教育力 の認知	知育	非常に十分だ	1.7	1.1
		かなり十分だ	30.5	25.4
	あまり十分でない	60.0	65.0	
	まったく十分でない	5.2	6.3	
体育	非常に十分だ	3.2	3.1	
	かなり十分だ	27.5	25.1	
	あまり十分でない	51.5	59.0	
	まったく十分でない	15.5	10.8	
徳育	非常に十分だ	5.5	3.1	
	かなり十分だ	46.5	39.6	
	あまり十分でない	44.5	50.4	
	まったく十分でない	1.5	4.8	
情操教育	非常に十分だ	2.0	0.9	
	かなり十分だ	22.0	16.8	
	あまり十分でない	59.5	63.5	
	まったく十分でない	13.5	16.8	
体育・ス ポーツ の場	学校	非常に期待できる	3.5	6.3
		かなり期待できる	40.5	52.4
	あまり期待できない	51.7	37.3	
	まったく期待できない	2.0	2.0	
家庭	非常に期待できる	1.2	2.0	
	かなり期待できる	22.5	21.9	
	あまり期待できない	59.7	63.0	
	まったく期待できない	14.2	10.8	
地域社会	非常に期待できる	1.5	3.1	
	かなり期待できる	18.5	31.3	
	あまり期待できない	61.2	54.1	
	まったく期待できない	15.2	8.3	
スポーツ教室	非常に期待できる	25.2	9.4	
	かなり期待できる	64.7	57.3	
	あまり期待できない	7.2	24.2	
	まったく期待できない	0.7	4.8	
塾 評価	学習塾	好ましい	6.7	10.0
		好ましくない	30.0	35.9
	好ましくない	57.5	51.0	
おけいこ塾	好ましい	47.7	42.2	
	好ましくない	28.2	26.2	
	好ましくない	17.5	23.6	
スポーツ教室	好ましい	94.5	77.5	
	好ましくない	3.5	6.3	
	好ましくない	0.2	10.8	

表5 スポーツ教室群と一般比較群における児童の通塾実態

項		目	スポーツ 教室群	一般 比較群
通塾 I	学習塾	通塾している	9.7	16.2
		通塾していない	90.2	82.6
	おけいこ塾	通塾している	49.7	39.6
		通塾していない	50.2	59.5
通塾 II	スポーツ活動 と学習塾	通塾している	9.7	6.6
		通塾していない	90.2	90.3
	スポーツ活動 とおけいこ塾	通塾している	49.7	14.5
		通塾していない	50.2	81.2

けいこ塾に通っている児童の割合はスポーツ教室参加群の方が高くなっている。さらに一般比較群の中から、スポーツ教室参加群と同じ条件にある児童、具体的にはすでに何らかのスポーツ活動に定期的に参加している児童(N=151)を取り上げ、通塾率を求めてみた。するとスポーツ教室参加群は、一般比較群よりもおけいこ塾への通塾率が高く、同時に学習塾への通塾率でも一般比較群を上まわっていることが明らかにされた。

表4は、子どもの教育の場に対する母親の認知を示している。これによれば、つぎのことが指摘できる。母親は、学校が知育を除く体育、徳育、情操教育の面で期待するほどの教育力をもつとはみなしていない。かといって母親は、知育、体育、徳育、情操教育がいずれにおいても家庭が十分な教育力をもつとは考えていない。そしてまた体育に関しては、母親は、学校よりもスポーツ教室の方を高く評価しており、期待も大きいことが理解されるのである。

4 スポーツ教室参加群における将来の活躍期待と母親の教育観

上述のように、スポーツ教室参加群に属する母親は特有の教育観をもち、子どもをスポーツ教室に参加させていることが明らかになった。同じように子どもをスポーツ教室に通わせている母親であっても、スポーツ志向の強い母親とそうでないものとの間に教育観の差異はみられないだろうか。ここでは現在参加しているスポーツにおいて子どもが将来どの程度活躍することを母親が期待しているかによりスポーツ教室参加群を活躍期待群と活躍非期待群に2分して、両群間の教育観の違いを検討する。

活躍期待群は、「国際レベル」(2.0%)、「全国レベ

表6 スポーツ教室群と一般比較群における教育観の差の検定結果一覧

項目	差の方向 (高得点・高比率の意味)	分散分析2×3 対象群要因の 主効果	
		S群	C群
教育 関 心 度	一般的関心		
	家庭での話し合い	} 関心大	>**
	情報注意		
	成績重視度		
	主要教科	} 重視する	>**
	体育		
夏期コース参加			
学習塾	} 参加させる	<***	
スポーツ教室			
教育 の 場 に 対 す る 認 知	学校の教育力の認知		
	知育	} 十分である	<***
	体育		
	徳育		
	情操教育		
	家庭の教育力の認知		
	知育	} 十分である	>***
	体育		
	徳育		
	情操教育		
	スポーツの場		
	学校	} 期待できる	<***
家庭			
地域社会			
スポーツ教室			
塾評価			
学習塾	} 好ましい	>***	
おけいこ塾			
スポーツ教室			
通 塾 実 態	通塾Ⅰ		
	学習塾	} 通塾している	>*
	おけいこ塾		
	通塾Ⅱ(スポーツ活動と)		
学習塾	} 通塾している	>**	
おけいこ塾			

注1) 両群間の差の検定には対象群要因と学年要因の2×3の分散分析における対象群要因の主効果を利用した。

注2) 表内の不等号は差の方向を表わし、不等号の左側がS群(スポーツ教室群)、右側がC群(一般比較群)にあたる。

注3) 表内のスター・マークは有意水準を示す:***P<.001, **P<.01, *P<.05, +P<.10。この注3)は表9, 表15, 表19に共通である。

ル」(5.2%), 「県・地域レベル」(35.5%)での活躍を期待する母親(N=171, 42.7%; 低学年N=75, 中学年N=66, 高学年N=30)。活躍非期待群は「興味程度でよい」とする母親(N=223, 55.7%; 低学年N=

91, 中学年N=107, 高学年N=35)である。

活躍期待群と活躍非期待群との差の検定には、児童の学年による影響を除去するために、活躍期待要因と学年要因による2×3の2元配置の分散分析を用い、活躍期待要因の主効果を両群間の差の有意性の判定に利用した。

活躍期待群と非期待群における①教育関心度を表7に、②教育の場に対する認知を表8に、これらの検定結果を表9にまとめた。

これらによれば活躍期待群は、活躍非期待群に比べて、体育面での学校、家庭の教育力を高く認知している。加うるに活躍期待群の方が、子どもの教育についての関心が高いことが示されている。

このように一般比較群に比較してスポーツ教室参加群は、強い教育関心をもっているところに特徴をもっていた。しかも同じようにスポーツ教室に子どもを参加させている母親であっても、子どものそのスポーツにおける将来の活躍期待が大きい母親、換言すれば、現在子どもが参加しているスポーツの技術向上を強く志向する母親

表7 活躍期待群と活躍非期待群の教育関心度

項目		活躍期待群	活躍非期待群		
一 般 的 関 心	家庭での話し合い	しばしばある	41.5	40.4	
		ときどきある	53.8	51.6	
		あまりない	4.7	7.2	
		ほとんどない	0.0	0.0	
	情報注意	いつも気をつけている	38.0	39.9	
		ときどき気をつけている	49.7	43.0	
		あまり気をつけていない	11.7	13.5	
		ほとんど気をつけていない	0.6	3.6	
	成 績 重 視 度	主要教科	非常に重視する	22.2	14.8
			かなり重視する	59.1	60.1
あまり重視しない			17.0	24.7	
まったく重視しない			0.0	0.4	
体 育		非常に重視する	17.0	10.8	
		かなり重視する	50.9	44.4	
		あまり重視しない	31.6	43.9	
		まったく重視しない	0.0	0.9	
夏 期 コ ー ス 参 加	学 習 塾	ぜひ参加させたい	3.5	0.9	
		できれば参加させたい	24.6	17.0	
		あまり参加させたくない	41.5	38.1	
		まったく参加させたくない	30.4	43.9	
	ス ポ ー ツ 教 室	ぜひ参加させたい	49.7	43.0	
		できれば参加させたい	47.4	52.5	
		あまり参加させたくない	1.2	3.1	
		まったく参加させたくない	0.0	0.4	

注1) 活躍期待群N=171, 活躍非期待群N=223。この注1)は表8~表9, 表12~表15に共通である。

表8 活躍期待群と活躍非期待群における教育の場に対する認知

項	目	活躍期待群	活躍非期待群
学校の教育力の認知	知 育	非常に十分だ 8.2 かなり十分だ 59.1 あまり十分でない 28.7 まったく十分でない 0.6	9.4 65.5 21.5 0.0
	体 育	非常に十分だ 7.6 かなり十分だ 42.1 あまり十分でない 43.9 まったく十分でない 3.5	2.2 39.0 51.1 4.5
	徳 育	非常に十分だ 2.3 かなり十分だ 37.4 あまり十分でない 49.1 まったく十分でない 8.8	2.7 34.1 52.9 7.2
	情操教育	非常に十分だ 2.3 かなり十分だ 37.4 あまり十分でない 52.6 まったく十分でない 5.3	3.1 32.3 51.1 9.9
家庭の教育力の認知	知 育	非常に十分だ 4.1 かなり十分だ 30.4 あまり十分でない 56.1 まったく十分でない 5.8	0.0 30.0 63.2 4.9
	体 育	非常に十分だ 5.8 かなり十分だ 32.2 あまり十分でない 46.8 まったく十分でない 12.3	0.9 23.8 55.6 17.9
	徳 育	非常に十分だ 6.4 かなり十分だ 50.9 あまり十分でない 39.2 まったく十分でない 1.2	4.0 43.5 48.9 1.8
	情操教育	非常に十分だ 3.5 かなり十分だ 21.1 あまり十分でない 58.5 まったく十分でない 12.9	0.4 22.9 60.5 13.9
体育・スポーツの場	学 校	非常に期待できる 5.8 かなり期待できる 44.4 あまり期待できない 43.9 まったく期待できない 2.9	1.8 38.1 57.4 1.3
	家 庭	非常に期待できる 2.9 かなり期待できる 25.7 あまり期待できない 56.7 まったく期待できない 12.3	0.0 19.3 62.8 16.1
	地域社会	非常に期待できる 3.5 かなり期待できる 22.2 あまり期待できない 57.9 まったく期待できない 11.7	0.0 15.7 64.1 17.9
	スポーツ教室	非常に期待できる 28.1 かなり期待できる 59.1 あまり期待できない 8.8 まったく期待できない 0.6	22.4 70.0 6.3 0.4
塾	学 習 塾	好ましい 9.4 しかたがない 31.6 好ましくない 53.2	4.9 28.7 61.0
	おけいこ塾	好ましい 48.0 しかたがない 26.3 好ましくない 18.1	47.1 30.5 17.0
	スポーツ教室	好ましい 95.9 しかたがない 1.8 好ましくない 0.0	93.7 4.5 0.4

表9 活躍期待群と活躍非期待群における教育観の差の検定結果一覧

項	目	差の方向 (高得点・高比率の意味)	分散分析2×3 活躍期待要因 の主効果	
			H群	L群
教育 関 心 度	一般的関心			
	家庭での話し合い	関心大		
	情報注意			
	成績重視度	重視する		>*
主要教科 体育			>**	
夏期コース参加 学習塾 スポーツ教室		参加させる		>**
教育の場 に 対 す る 認 知	学校の教育力の認知			
	知育	十分である		>*
	体育			
	徳育			
	情操教育			
	家庭の教育力の認知			
	知育	十分である		>**
	体育			(>)+
	徳育			
	情操教育			
	スポーツの場			
	学校	期待できる		(>)+
家庭			>**	
地域社会				
スポーツ教室				
塾評価				
学習塾	好ましい		(>)+	
おけいこ塾				
スポーツ教室				
通塾				
学習塾	通塾している		(<)+	
おけいこ塾				

ほど子どもの教育について強い関心をもっている事実がうかび上がってくる。

II スポーツ教室に対する母親の期待と評価

母親はどのような期待をもって子どもをスポーツ教室に参加させ、そして現在スポーツ教室にどのような評価を下しているのであろうか。スポーツ教室に対する母親の期待と評価を、活躍期待度とスポーツ種の2つの観点から分析する。

1 スポーツ教室に対する母親の期待と評価の概要

まず分析に先だって、ここではスポーツ教室に対する

母親の期待および評価について概観しておこう。

表10は、子どもをスポーツ教室に参加させた目的を10項目にわたって尋ねた結果を集計したものである。参加目的のうちでは「身体鍛練」が最も強く意識されており、以下「スポーツの楽しさを学ばせる」、「運動技能の向上」、「集団生活を経験させる」、「性格形成」、「しつけ」などがつづいている。すなわちスポーツ教室に子どもを参加させるにあたって、母親は、まず子どもの身体鍛練を念頭におきつつ、ひとつには運動技能の向上を、他方ではスポーツを行わせることを通じて子どもの社会性の涵養や、人格形成を期待しているといえるようである。またスポーツ教室選定にかなりの影響力をもった「友だち」の存在も、参加の目的としてはあまり強く意識されていない点が興味深い。

表10 スポーツ教室参加目的

項目	非常に強くあった	かなりあった	いくらかあった	まったくなかった
A しつけ	15.7	30.5	35.5	13.7
B 性格形成	27.0	38.0	26.5	5.2
C 身体鍛練	68.5	25.0	5.7	0.2
D 友達づくり	12.0	20.7	43.2	20.7
E 運動技能	25.7	30.5	33.5	7.0
F 集団生活	26.0	30.5	29.7	10.2
G スポーツの楽しさ	29.5	38.0	24.2	5.2
H 気ばらし	0.5	4.7	18.5	71.5
I 遊び場がなくて	2.7	4.0	19.5	68.8
J なんとなく	4.0	5.2	17.5	68.5

注1) N=400。この注1)は表11に共通である。

表11では、スポーツ教室に通い始めてからの子どもの変容を14項目について示している。スポーツ教室への参加がどの程度の成果をもたらしているかについては、比較データがないため明らかではない。しかし少なくとも母親の認知レベルでは、スポーツ教室の効用が非常に大きいと解釈されていることは事実である。

したがって子どもをスポーツ教室に参加させて「非常に」「かなり」よかったと満足している母親が大部分を占め(62.5%, 35.5%), 反対に「あまり」「まったく」よくなかったと答えた母親は極めて少数である(1.5%, 0.0%)。

こうしたスポーツ教室への高い満足度は、参加の継続意志にも関連することが当然予想される。そこで「もし子どもの成績が下がったとしたらスポーツ教室参加をどうするか」という質問を投じてみた。「すぐにやめさせる」と答えた母親は皆無であり、「しばらくようすをみ

表11 スポーツ教室参加による変容

項目	増加(向上)	不変	減少(悪化)
A 学業成績	14.0	77.5	0.5
B 家庭での勉強量	10.7	79.5	3.2
C 礼儀・言葉使い	22.2	75.0	0.7
D 自立性	49.5	47.5	0.0
E 協調性	39.0	58.0	0.0
F 忍耐力	52.2	45.0	0.2
G 公正さ	28.2	68.8	0.0
H 決断力	30.5	66.5	0.0
I 明朗性	45.0	52.2	0.0
J 積極性	44.0	53.0	0.0
K 社交性	36.5	60.0	0.0
L 健康状態	59.7	37.0	0.2
M 友だち	51.7	46.0	0.2
N スポーツ愛好度	67.5	30.0	0.2

てやめさせるかどうか決める」とした母親も2.50%にとどまった。結局約8割の母親は、「学業成績に関係なく続けて参加させる」と強い継続意志を表明している。

2 活躍期待度とスポーツ教室に対する母親の期待および評価

スポーツ教室が母親の期待に十分応えていることは、教室参加への高い評価でもって示されていた。ここでは、スポーツ教室への期待や評価も、そのスポーツにおいて子どもが将来どの程度活躍することを望んでいるか、いわゆる活躍期待度によって異なるのではなかろうかとの仮説に基づいてさらに分析を試みた。

活躍期待群と活躍非期待群における ①スポーツ教室参加の目的を表12に、②スポーツ教室参加による変容を表13に、③スポーツ教室に対する評価を表14に、両群間の差の検定結果のまとめを表15に示している。なお検定には、先述の理由から活躍期待要因と学年要因の2×3の分散分析を行った。

子どもの活躍を期待する母親は、そうでない母親に比べて参加の目的意識がより明確である。とりわけ「しつけ」「性格形成」「集団生活を経験させる」の3項目において活躍期待群と非期待群との間に有意差がみられ、前者が強く意識している傾向を指摘することができる。と同時に成果の面でも、「学業成績が向上した」と「家庭での勉強量が増した」の2項目を除く他の12項目について、子どもの活躍を期待する母親の方が成果を積極的に認知している。

3 スポーツ種目とスポーツ教室に対する母親の期待および評価

表12 活躍期待群と活躍非期待群におけるスポーツ教室参加目的

項目	活躍期待群				活躍非期待群			
	非常に強くあった	かなりあった	いくらかあった	まったくなかった	非常に強くあった	かなりあった	いくらかあった	まったくなかった
A しつけ	15.8	38.6	33.9	7.0	15.7	25.1	36.8	18.8
B 性格形成	32.2	41.5	21.6	1.8	22.9	36.3	30.0	8.1
C 身体鍛練	71.3	22.2	5.3	0.6	66.8	26.5	6.3	0.0
D 友達づくり	14.0	23.4	41.5	18.1	10.3	18.8	44.4	23.3
E 運動技能	28.7	33.9	28.1	5.8	23.8	27.8	37.7	7.6
F 集団生活	33.3	28.7	28.7	5.8	20.6	31.8	30.5	13.9
G スポーツの楽しさ	34.5	38.0	21.6	3.5	26.0	38.1	26.0	6.3
H 気ばらし	0.6	5.8	21.6	67.8	0.4	4.0	16.6	74.0
I 遊び場がなくて	1.2	5.3	18.7	69.6	3.5	3.1	20.6	68.2
J なんとなく	4.1	4.7	22.2	64.9	4.0	5.8	13.5	71.7

表13 活躍期待群と活躍非期待群におけるスポーツ教室参加による変容

項目	活躍期待群			活躍非期待群		
	増加(向上)	不変	減少(悪化)	増加(向上)	不変	減少(悪化)
A 学業成績	18.1	74.3	0.6	11.2	79.4	0.4
B 家庭での勉強量	15.2	76.0	3.5	7.6	81.6	3.1
C 礼儀・言葉使い	31.0	67.3	0.6	16.1	80.3	0.9
D 自立性	58.5	38.6	0.0	42.6	54.3	0.0
E 協調性	46.8	50.3	0.0	33.6	63.2	0.0
F 忍耐力	64.3	32.7	0.6	43.0	54.3	0.0
G 公正さ	37.4	60.2	0.0	21.1	75.3	0.0
H 決断力	39.8	57.3	0.0	23.8	73.1	0.0
I 明朗性	57.9	39.8	0.0	35.0	61.9	0.0
J 積極性	55.6	40.9	0.0	35.4	61.9	0.0
K 社交性	45.6	50.3	0.0	29.1	67.7	0.0
L 健康状態	67.3	30.4	0.0	52.9	43.0	0.4
M 友だち	61.4	36.3	0.6	44.8	52.9	0.0
N スポーツ愛好度	78.9	18.7	0.0	58.3	39.0	0.4

表14 活躍期待群と活躍非期待群におけるスポーツ教室に対する評価

項目		活躍期待群	活躍非期待群
参加の満足感	非常によかった	70.2	56.1
	かなりよかった	28.1	41.7
	あまりよくなかった	1.2	1.8
	まったくよくなかった	0.0	0.0
参加の継続意志	すぐやめさせる	0.0	0.0
	しばらくようすをみる	17.0	23.8
	続けて参加させる	82.5	74.0
参加の誇り	非常に誇りに思う	35.7	15.7
	かなり誇りに思う	22.8	20.2
	いくらか誇りに思う	31.6	39.0
	まったく誇りに思わない	7.6	24.2
スポーツ教室一般の評価	好ましい	95.9	93.7
	しかたがない	1.8	4.5
	好ましくない	0.0	0.4
児童の参加時の様子	非常に楽しそう	35.1	31.4
	かなり楽しそう	53.2	48.9
	あまり楽しそうでない	10.5	17.9
	まったく楽しそうでない	0.0	0.9

児童が参加しているスポーツ教室の種類は多様である。このようにスポーツの種目が異なれば、それに応じておのずから参加の目的やもたらされる成果に違いが予想されよう。そこで、橋本ら(1976)の分類を参酌しながら、スポーツ種目の類型化を図り、スポーツ類型によってスポーツ教育に対する母親の期待と評価を考察したい。

それにしたがえばスポーツ教室は、サッカー、ラグビーを直接的集団競技(N=116;低学年N=52,中学年N=50,高学年N=14)、剣道、柔道を直接的個人競技(N=202;低学年N=109,中学年N=66,高学年N=27)、陸上、水泳を間接的個人競技(N=79;低学年N=7,中学年N=49,高学年N=23)の3つに類型化されよう。そして前述したと同じ理由から、スポーツ類型要因と学年要因の3×3の分散分析を行い、スポーツ類型間の差異を検討した。

表15 活躍期待群と活躍非期待群における、スポーツ教室に対する期待および評価の差の検定結果一覧

項	目	差の方向 (高得点・高比率の意味)	分散分析2×3 活躍期待要因の主効果	
			H群	L群
スポーツ教室参加の契機と目的	参加の主導	親のみ希望 意識していた		
	Aしつけ		>**	
	B性格形成		>**	
	C身体鍛練			
	D友達づくり			
	E運動技能		(>)+	
	F集団生活		>**	
	Gスポーツの楽しさ		(>)+	
	H気ばらし			
	I遊び場がなくて			
	Jなんとなく			
スポーツ教室参加による変容	A学業成績	増加(向上)した		
	B家庭での勉強量			
	C礼儀・言葉使い		>**	
	D自立性		>**	
	E協調性		>*	
	F忍耐力		>***	
	G公正さ		>***	
	H決断力		>***	
	I明朗性		>***	
	J積極性		>***	
	K社交性		>***	
	L健康状態		(>)+	
	M友だち		>**	
	Nスポーツ愛好度		>***	
対する評価に	参加の満足感	大である 楽しそうだ	>*	
	参加の継続意志			
	参加の誇り		>***	
	スポーツ教室一般の評価		(>)+	
	児童の参加時の様子			

注1) 両群間の差の検定には活躍期待要因と学年要因の2×3の分散分析における活躍期待要因の主効果を利用した。

注2) 表内の不等号は差の方向を表わし、不等号の左側はH群(活躍期待群)、右側はL群(活躍非期待群)にあたる。

スポーツ類型別の①スポーツ教室参加の目的を表16に、②スポーツ教室参加による変容を表17に、③スポーツ教室に対する評価を表18に、検定結果のまとめを表19に示している。

予想通り、スポーツ教室に子どもを参加させた目的はスポーツ類型によって著しく異なっている。すなわち、直接的集団競技では「友だちづくり」「集団生活を体験させるため」「スポーツの楽しさを教えるため」などが、参加の目的として強く意識されている。この類型に含まれるスポーツ種目がいずれもチームワークを必要と

することから、それらのスポーツ特性が参加の目的に直接されたものと解釈できる。これに対して「しつけ」や「性格形成」が強く意識されているのが直接的個人競技である。ここは、母親が日本古来の武道系スポーツのもつ格式、礼儀を子どもに習得させることを望んでいることを看取できよう。そして間接的個人競技は、「運動技能の向上」が特に強く意識されているところに特徴もっている。

このように参加の目的は異なるにもかかわらず、成果の面では、直接的個人競技で他の2種類に比して「明朗性」と「スポーツ愛好度」の2項目で評価が消極的である他は、スポーツ類型による有意な差は指摘できない。これは、母親が子どもの活躍を期待するか否か、すなわち活躍期待群と非期待群間にみられた成果の認知度の差と著しい対照をなしている。すなわち、スポーツ教室への参加目的の差は、子どもにどのようなスポーツを行わせるかといういわゆるスポーツ種目により、そしてスポーツ教室参加による成果の認知の差は、スポーツ種目よりもむしろ母親の側での子どもに対する活躍期待によってもたらされているようである。

III 学校外教育としてのスポーツ教室の意義と問題点

当初我われは、子どものスポーツ教室への参加に、親のスポーツ経験が何らかの影響を及ぼしてはいないかと予測した。分析結果からは、父親の75.7%、母親の50.5%がスポーツ経験を有していることが示された。しかしこれらの数値は、一般児童の両親のスポーツ経験率と比較して必ずしも差があるとはいえないことが明らかになった。それゆえスポーツ教室への参加を促した理由は、他に求められねばならない。

そこで着目したのが、本調査で取り上げたスポーツ教室に児童を参加させている母親が、同年令層の子どもをもつ一般の母親よりも教育について家庭で話しあう頻度も高く、教育情報にもより気を配っている事実である。しかも学校での子どもの成績をもより重視する傾向も示されていた。つまりスポーツ教室に児童を参加させている母親は、教育について強い関心をもつ母親であった。

これら母親が子どもをスポーツ教室に参加させている意識の背景にあるものは何であろうか。それを究明するひとつの手がかりは、彼女たちが子どもの身体活動の機会としてスポーツ教室をどのように評価しているかを考察することから得られる。スポーツ教室参加群と一般比較群との有意差検定を行った表6によれば、学校のもつ知育・体育・徳育・情操教育の4つの教育力のうち体育に関してのみ有意差がみられ、スポーツ教室参加群の方が体育面で学校の教育力を期待する程度は低くなっている。また学校、家庭、地域社会、スポーツ教室のそれぞ

表16 スポーツ類型別のスポーツ教室参加目的

項 目	直接的集団競技群				直接的個人競技群				間接的個人競技群			
	非常に強かった	かなりあった	いっくらあった	まったくなかった	非常に強かった	かなりあった	いっくらあった	まったくなかった	非常に強かった	かなりあった	いっくらあった	まったくなかった
A しつけ	6.9	31.0	46.6	12.9	25.2	35.1	30.7	4.0	5.1	17.7	30.4	40.5
B 性格形成	25.0	41.4	27.6	5.2	33.2	36.6	24.3	2.5	15.2	35.4	30.4	12.7
C 身体鍛練	67.2	25.9	6.9	0.0	62.9	29.2	6.4	0.5	84.8	12.7	2.5	0.0
D 友達づくり	21.6	28.4	39.7	8.6	8.4	16.8	47.0	24.3	7.6	17.7	39.2	30.4
E 運動技能	26.7	30.2	37.1	4.3	18.8	28.7	39.1	9.9	41.8	35.4	13.9	3.8
F 集団生活	39.7	34.5	21.6	2.6	21.3	27.7	35.1	11.9	17.7	31.6	27.8	17.7
G スポーツの楽しさ	41.4	38.8	18.1	0.9	19.3	42.1	26.2	7.9	36.7	27.8	27.8	5.1
H 気ばらし	0.0	4.3	21.6	71.6	0.0	5.4	17.8	71.8	1.3	3.8	15.2	72.2
I 遊び場がなくて	3.4	5.2	30.2	58.6	3.5	3.5	16.3	71.3	0.0	3.8	12.7	75.9
J なんとなく	2.6	8.6	26.7	59.5	5.0	4.5	13.9	71.8	3.8	2.5	13.9	72.2

注1) 直接的集団競技群N=116, 直接的個人競技群N=202, 間接的個人競技群N=79. この注1) は表17~表19に共通である。

表17 スポーツ類型別のスポーツ教室参加による変容

項 目	直接的集団競技群			直接的個人競技群			間接的個人競技群		
	増加(向上)	不変	減少(悪化)	増加(向上)	不変	減少(悪化)	増加(向上)	不変	減少(悪化)
A 学業成績	14.7	75.9	0.9	11.9	78.7	0.5	19.0	77.2	0.0
B 家庭での勉強量	10.3	80.2	2.6	10.4	79.7	3.0	12.7	78.5	5.1
C 礼儀・言葉使い	25.0	70.7	1.7	24.3	73.8	0.5	12.7	84.8	0.0
D 自立性	49.1	49.1	0.0	47.0	49.5	0.0	57.0	40.5	0.0
E 協調性	47.4	50.0	0.0	33.7	63.4	0.0	41.8	55.7	0.0
F 忍耐力	50.0	47.4	0.0	49.5	48.0	0.5	63.3	34.2	0.0
G 公正さ	29.3	68.1	0.0	28.7	68.3	0.0	26.6	70.9	0.0
H 決断力	34.5	62.9	0.0	28.2	69.3	0.0	31.6	64.6	0.0
I 明朗性	57.8	40.5	0.0	39.1	58.4	0.0	41.8	54.4	0.0
J 積極性	46.6	50.9	0.0	44.1	53.0	0.0	40.5	57.0	0.0
K 社交性	40.5	55.2	0.0	33.2	64.4	0.0	39.2	57.0	0.0
L 健康状態	58.6	38.8	0.0	56.4	41.1	0.0	70.9	24.1	1.3
M 友だち	60.3	37.9	0.0	48.5	49.5	0.5	48.1	49.4	0.0
N スポーツ愛好度	76.7	21.6	0.0	61.4	36.1	0.5	69.6	27.8	0.0

表18 スポーツ類型別のスポーツ教室に対する評価

項 目		直接的集団競技群	直接的個人競技群	間接的個人競技群
		参加の満足感	非常によかった かなりよかった あまりよくなかった まったくよくなかった	69.8 30.2 0.0 0.0
参加の継続意志	すぐやめさせる しばらくようすをみる 続けて参加させる	0.0 25.0 72.4	0.0 17.8 81.7	0.0 21.5 75.9
参加の誇り	非常に誇りに思う かなり誇りに思う いっくら誇りに思う まったく誇りに思わない	25.0 21.6 37.9 15.5	25.7 22.8 35.6 14.9	22.8 15.2 32.9 24.1
スポーツ教室一般の評価	好ましい しかなかった 好ましくない	96.6 2.6 0.0	94.6 3.0 0.5	91.1 6.3 0.0
児童の参加時の様子	非常に楽しそうだ かなり楽しそうだ あまり楽しそうでない まったく楽しそうでない	47.4 44.0 8.6 0.0	17.8 58.4 21.3 1.0	51.9 39.2 7.6 0.0

れについて、スポーツの場としてどの程度期待できるか尋ねてみると、スポーツ教室参加群と一般比較群との間に有意差があったのは、学校とスポーツ教室の2つである。スポーツ教室参加群の場合、スポーツの場として学校に対する期待は低く、反対にスポーツ教室に対する評価は極めて積極的であった。

ここに、教育関心の高い母親ほど学校、家庭、地域社会をスポーツの場として認知する傾向は弱いこと、スポーツ教室参加児童の母親は教育関心が高いという2つの事実が明らかになってくる。これらを総合する時、スポーツ教室への参加は、家庭・地域社会はもとより学校が子どものスポーツの場としては期待できないという意識の裏がえしとしてとらえることはできないだろうか。子どもにとってスポーツの場が十全でないことの現状認識、それゆえにスポーツの機会を何とかして子どもに保障してやりたいという意識が母親をして子どもをスポーツ教室に参加させることになっているとはいえないだろう

表19 スポーツ類型による、スポーツ教室に対する期待および評価の差の検定結果一覧

項	目	分散分析 (3×3) スポーツ類型 要因の主効果
スポーツ教室参加の契機と目的	参加の主導	*
	A しつけ	***
	B 性格形成	***
	C 身体鍛練	*
	D 友達づくり	***
	E 運動技能	***
	F 集団生活	***
	G スポーツの楽しさ	**
	H 気ばらし	
	I 遊び場がなくて	*
J なんとなく		
スポーツ教室参加による変容	A 学業成績	
	B 家庭での勉強量	
	C 礼儀・言葉使い	
	D 自立性	
	E 協調性	
	F 忍耐力	
	G 公正さ	
	H 決断力	
	I 明朗性	**
	J 積極性	
	K 社交性	
	L 健康状態	
	M 友だち	
	N スポーツ愛好度	*
対する評価室に	参加の満足感	*
	参加の継続意志	
	参加の誇り	+
	スポーツ教室一般の評価	
	将来の活躍期待	*
児童の参加時の様子	***	

注1) 三群間の差の検定にはスポーツ類型要因と学年要因の3×3の分散分析におけるスポーツ類型要因の主効果を利用した。

うか。

と同時に、一般児童に比べてスポーツ教室参加児童の場合、通塾率が高いことに注目したい。これは、教育関心の高い母親が学校外での教育を強く志向すれば一般的にみられる傾向に他ならないとなれば、子どもをスポーツ教室に参加させるにあたって、平準化された学校教育への不満、さらには自分の子どもを他の子どもより少しでも先じた有利な位置におきたいとする親の意識が働いていないとはいえない。

またスポーツ教室に子どもを参加させた目的として、「しつけ」や「性格形成」がかなり強く意識されている

ことも看過できない。そもそも、しつけや性格形成とは、家庭における教育力の衰微が指摘される中で、母親たちは、本来家庭教育が担うべき重要な機能をスポーツ教室に求めているのではないだろうか。家庭教育をスポーツ教室に参加させることで肩がわりさせようとするこの傾向は、とりわけ武道系スポーツへの参加において顕著である。

そうした親の意識であれば、スポーツ教室参加のリーダーシップが子どもよりもむしろ親にあるとの分析結果ともおのずから符合する。まずスポーツ教室に関する情報は、家庭で頻繁に行われる子どもの教育についての課題として母親から提示される。多くの場合、子どもも希望し、親子双方の合意に基づいて、スポーツ教室への参加が決定されることになるが、しかし子どもの側で参加を希望しない時には、たとえ子どもの意志を無視した形であったにせよ、親は、「子どものためを思って」スポーツ教室に強引に参加させることも起こりうるのである。子どもは希望しなかったにもかかわらず、親が一方的に子どもをスポーツ教室に参加させた割合は、直接的集団競技12.1%、直接的個人競技29.7%、間接的個人競技24.1%で、スポーツ類型間に有意差(P<.05)がみられる。

そして興味深いことに家庭教育で行うべき「しつけ」「人格形成」を強く期待した武道系スポーツが属するスポーツ類型と、参加において親が子どもの意志を無視してまで主導的な役割を果たす割合の最も高いスポーツ類型とがみじくも一致する。その結果、サッカーやラグビーなどの直接的集団競技と比較すると直接的個人競技や、間接的個人競技では、子どもの参加の態度もやや消極的となってくることも指摘しておかねばならない。

ところで、児童をもつ母親の教育観、とくに知育・体育観を学年との関係から考察した前回の報告では、学年の上昇に伴って母親の教育観において知育重視の傾向が顕在化することを明らかにした。すなわち、学年の上昇には関係なく終始一貫して母親は、子どもにとってスポーツ活動の意義を認めてはいるものの、高学年になるにしたがって知育、体育観は二元化し、知育重視の傾向が強くなるにつれて体育は建前としてのみ意識されているにすぎなくなる。

さてスポーツ教室の場合も参加者の学年別構成によれば、低・中学年児童が大半を占め、高学年になれば参加者は急激に減少している。つまり、スポーツ教室に子どもを参加させている母親も、学年の上昇とともに知育を重視する傾向から解放されているとはいえない。また現在スポーツ教室に参加している子どもにしても、一般児童よりも通塾率が高い実態は、スポーツ活動を行わせつつ、他方では学習塾に通わせることによって知育重視の一般的傾向に乗りおくれなための対策を十分に構じて

いることを意味している。

結果的に、スポーツ教室に参加するまさにそのことによって、子どもは自由な時間を奪われ、ゆとりある生活は保障されにくい状況におかれることが余儀なくされている。確かにスポーツ教室は、親が意図したように身体鍛錬の場を提供することになっているし、成果についても親は概して積極的に認知をしているようである。しかし、スポーツ教室への参加によって自由時間や友だちを失い、遊びを喪失している事態は、子どもの発達にとっての重大なマイナス面として見のがすことはできない。

これに関連して、スポーツ教室への参加が遊びをどれだけ代替するかという問題もまた提起されてくる。深谷(1978)は、遊びの効用を①健康の増進、②社会性の発達、③創造性の開発、④自主性の涵養、⑤緊張の解消、⑥知性の促進、⑦忍耐力の強化の7つに要約している。これらは、子ども同志の集団の中でこそ最もよく習得されるものである。とすれば、一定の指導者の下で行われるスポーツ教室での活動が、これら7項目のうち一体どれだけのものを現実にも子どもにもたらしているかは少なからず疑問である。

このようにみえてくると、中学年児童をピークに高学年になると激減する参加の実態、また子どもをそれに参加させた時の親の側での目的や意図の面で、スポーツ教室は、おけいこ塾の場合と近似した性格をもつことが理解される。そして、一般におけいこ塾への参加が女子を中心としているのに対し、スポーツ教室参加者の多くが男子で構成されていることから、スポーツ教室とは主に男子を対象としたおけいこ塾として捉えることができるようである。

ともあれ、スポーツ教室への参加は、あくまで自由意志に基づくものである。しかし、それゆえに親の教育意図が強く反映されることにもなり、ともすれば子どもの意志さえ無視されるという極端な事例をはじめとして種々の問題を新たに生起する。学校外教育は、学校教育や家庭教育の単なる延長線上に位置するものではなく、ましてやそれらを肩がわりするものであってはならない。それゆえスポーツ教室が学校外教育としての固有の役割を果たすためには、それへの参加が親の狭隘な教育観や独善に左右されるべきではなく、子どもの発達という観点からの配慮が何にもまして重要と考える。

参 考 文 献

- 深田博己・小池源吾 1978 子どもの発達と学校外教育
(Ⅰ)―母親の教育観にみる体育・スポーツ活動
― 広島大学教育学部紀要, 第1部, 第27号,
Pp. 115-124
- 深谷昌志 1978 現代の子どもたち 社会教育, 第33

巻, 第9号, Pp. 5-10

- 橋本勲・石井源信・中村寿博 1976 スポーツに対する
態度の研究―中学校における種目, 性の観点から―
中京女子大学紀要, 第11号, Pp. 69-79
- 木全力夫 1978 学校外教育の自由と公共性―子どもの
生活とけいこごとの意義についての考察―酒匂
一雄(編) 地域の子どもと学校外教育 東洋館
出版 Pp. 120-131
- 正木健雄 1979 子どもの体力 大月書店
- 酒匂一雄 1978 学校外教育研究の今日的意義 酒匂一
雄(編) 地域の子どもと学校外教育 東洋館
出版 Pp. 2-15
- 酒匂一雄 1979 子育ての構造的危機と社会教育 月刊
社会教育, No.263, Pp. 14-21
- 吉田昇 1978 社会教育としての学校外教育 酒匂一
雄(編) 地域の子どもと学校外教育 東洋館
出版 Pp. 26-35